

野多目C遺跡 5

— 野多目 C 遺跡第 6 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1314 集

2017

福岡市教育委員会

N O T A M E

野多目C遺跡 5

— 野多目C遺跡第6次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1314集



遺跡略号 NMC-6
調査番号 1438

2017

福岡市教育委員会



(1) 調査区遠景（北東から）



(2) 調査区全景（西から）

序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。福岡市内には数多くの歴史的・文化的遺産があり、それらを保護し、後世に伝えることは、現在に生きる私どもの責務であります。

本市では、近年の著しい都市化の中でやむを得ず失われてしまう埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存を行うことによって後世まで伝えるよう努めています。

本書は、道路建設に伴って実施した野多目C遺跡第6次調査について報告するものです。今回の調査では、縄文時代から中世にかけての遺構を確認し、旧石器時代、縄文時代中期から後期、弥生時代初め頃の土器や石器が多く出土しました。これらは、地域の歴史を解明していく上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、株式会社 フォレストヴィラホーム様をはじめとする関係者の方々にはご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例言

1. 本書は、福岡市南区野多目4丁目277、278-1、285-1、286、287-1地内において、福岡市教育委員会が道路建設に伴って平成27(2015)年1月6日から同年4月16日にかけて発掘調査を実施した野多目C遺跡第6次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、受託事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本遺跡は、「福岡市文化財分布地図 中部南部」(福岡市教委1980)において、「野多目C遺跡群」として周知された遺跡である。遺跡内では、これまで5次にわたる調査が実施されているが、いずれも小字名である「拈渡」を冠した野多目拈渡遺跡として報告がなされてきた(福岡市埋蔵文化財調査報告書第93集・136集・160集・333集)。平成20(2008)年に「野多目C遺跡群」から、「野多目C遺跡」へ名称変更がなされた。今回の報告にあたり、これまでの調査および報告書名を整理し、本書に収録した調査の調査次数は「野多目C遺跡」の6次調査、書名については、野多目C遺跡第5次調査が未報告のため、「野多目拈渡遺跡4」から引き続き、「野多目C遺跡5」とした。
5. 本書に掲載した遺構の実測図作成および写真撮影は、調査担当の吉田大輔が行った。
6. 本書に掲載した遺物の実測図作成は、主に谷直子が行い、吉田がこれを補った。写真撮影は吉田が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は、吉田が行った。
8. 本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ}21'$ 西偏する。
9. 調査で検出した遺構については、土坑をSK、小穴をSP、溝をSD、自然流路をSRとし、通し番号を付している。
10. 本書に関わる記録類・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されるので活用されたい。
11. 本書の執筆および編集は吉田が行った。

遺 跡 名	野多目C遺跡	調 査 次 数	第6次	遺 跡 略 号	N M C - 6
調 査 番 号	1438	分 布 地 図 幅 名	040 老司	遺 跡 名	0147
申 請 地 面 積	5.606m ²	調 査 対 象 面 積	1.076.94m ²	調 査 面 積	1.039.15m ²
調 査 期 間	平成27(2015)年1月6日～4月16日			事 前 審 査 番 号	26-2-543
調 査 地	福岡市南区野多目4丁目277、278-1、285-1、286、287-1				

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	5
1. 概要	5
1) 調査の経過	5
2) 調査の概要と層序	6
2. 造構と遺物	6
1) 土坑（SK）	6
2) 溝（SD）	11
3) 自然流路（SR）	15
IV. 結語	26

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図（1/25,000）	3
第2図 調査地点位置図①（1/5,000）	4
第3図 調査地点位置図②（1/2,000）	4
第4図 調査区位置図（1/1,000）	5
第5図 調査区基本土層略図（1/10）	6
第6図 調査区全体図（1/250）	折込
第7図 SK 5・8実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/1・1/3）	7
第8図 SK 40・54・61・62・67・69実測図（1/40）	8
第9図 SK 13・15・24・40・42・58・69・74出土遺物実測図（1/1・1/2・1/3）	10
第10図 SD 30・34実測図（1/60）	11
第11図 SD 43・49、SR 63実測図（1/40・1/200）	12
第12図 SD 38・43・49、SR 63出土遺物（1/1・1/2・1/3）	13
第13図 SR 82実測図（1/100・1/40）	14
第14図 SR 82出土遺物実測図①（1/3）	15
第15図 SR 82出土遺物実測図②（1/3）	16
第16図 SR 82出土遺物実測図③（1/3）	17
第17図 SR 82出土遺物実測図④（1/3）	18
第18図 SR 82出土遺物実測図⑤（1/1）	19
第19図 SR 82出土遺物実測図⑥（1/1・1/2）	20
第20図 SR 82出土遺物実測図⑦（1/2）	22
第21図 SR 82出土遺物実測図⑧（1/2）	23
第22図 SR 82出土遺物実測図⑨（1/3）	24
第23図 包含層・検出面出土遺物実測図（1/1・1/2・1/3）	25

卷頭図版目次

- (1) 調査区遠景（北東から）
- (2) 調査区全景（西から）

写真図版目次

写真図版1

- (1) 調査区全景（西から）
- (2) 調査区全景（北から）

写真図版2

- (3) 調査区南半部（西から）
- (4) 調査区北半部（西から）
- (5) 調査区西側（西から）

写真図版3

- (6) 調査前の状況（南西から）
- (7) 調査区南半部北側（南西から）
- (8) 調査区南半部中央付近（北西から）
- (9) 調査区南半部南側（北西から）
- (10) SK 5 北壁土層（南から）
- (11) SK 5 完掘状況（北西から）
- (12) SK 8 完掘状況（北から）
- (13) SK 40 完掘状況（北から）

写真図版4

- (14) SK 54 北壁土層（南西から）
- (15) SK 54（南から）
- (16) SK 54 遺物出土状況（南から）
- (17) SK 62 遺物出土状況（東から）
- (18) SK 66 東壁土層（北西から）
- (19) SK 66 完掘状況（北西から）
- (20) SK 67 東壁土層（西から）
- (21) SK 67 完掘状況（南西から）

写真図版5

- (22) SD 30・34（南から）
- (23) SD 43・49（南から）
- (24) SR 82（北西から）
- (25) SR 82（西から）
- (26) SR 82 西側 西壁土層（南東から）
- (27) SR 82 東側 種子出土状況（南東から）
- (28) SR 82 西側 遺物出土状況（西から）
- (29) SR 82 東側 遺物出土状況（南から）

写真図版6

- (30) 出土遺物①
- (31) 出土遺物②

写真図版7

- (32) 出土遺物③
- (33) 出土遺物④

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成 26（2014）年 9 月 24 日付で、福岡市南区野多目 4 丁目 277、278-1、285-1、286、287-1 地内（敷地面積：5,606m²）における宅地造成・道路建設事業に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、株式会社 フォレストヴィラホームより福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課（現：埋蔵文化財課）宛てになされた（事前審査番号：26-2-543）。照会地が、周知の埋蔵文化財包蔵地である野多目 C 遺跡に含まれ、近接して 1～5 次調査が実施されており遺構が拡がる可能性が高いことから、平成 26 年 10 月 3 日に確認調査を実施した。その結果、現地表面下 30～40cm で土坑や溝等の遺構が検出されたことから、遺構の保全等について申請者と協議を行った。その結果、事業対象面積 5,606 m² のうち市道編入予定の道路が建設され、埋蔵文化財への影響が回避できない部分 1,076.94m² については記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成 26（2014）年 12 月 22 日付で株式会社 フォレストヴィラホームを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財調査業務委託契約を締結し、平成 27（2015）年 1 月 6 日より発掘調査を、平成 28 年度に整理・報告書作成を行った。

2. 調査の組織

調査委託 株式会社 フォレストヴィラホーム

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査：平成 26・27 年度 資料整理：平成 28 年度）

調査総括 文化財部埋蔵文化財調査課（現：埋蔵文化財課） 課長 常松幹雄

同課調査第 2 係長 榎本義嗣（26 年度）

調査第 1 係長 吉武学（27・28 年度）

庶務 文化財部埋蔵文化財審査課（現：埋蔵文化財課） 管理係長 内山広司（26 年度）

大塚紀宜（27・28 年度）

管理係 川村啓子（26・27 年度）

入江よう子（28 年度）

事前審査 文化財部埋蔵文化財審査課（現：埋蔵文化財課）事前審査係長 佐藤一郎

事前審査係主任文化財主事 池田祐司

事前審査係文化財主事 板倉有大（26・27 年度）

吉田大輔（28 年度）

調査担当 文化財部埋蔵文化財調査課（現：埋蔵文化財課）文化財主事 吉田大輔（26・27 年度）

発掘作業 石川洋子 井上久美子 岩本三重子 兼田ミヤ子 木田憲作 木田ひろ子 坂口壽美子

瀬戸裕子 芹川淳子 田中ゆみ子 塚原義一郎 土山美咲 鶴丸和良 中辻俊巳

長野智鶴 野田英機 服部弘勝 吹春恵治 松下楓季 水田政敏 水田ミヨ子

満田隆 諸泉良子 波多江彩香（福岡大学）

整理補助 谷直子

整理作業 宮崎由美子

II. 遺跡の立地と環境

野多目C遺跡は、福岡平野のはば中央を北流する那珂川の中流域左岸に形成された標高15m程の河岸段丘(中位段丘)上に位置している。

例言にも記述したが、本遺跡は『福岡市文化財分布地図 中部南部』(福岡市教育委員会1980)において、野多目C遺跡群として周知された遺跡である。遺跡内ではこれまで、5次にわたる調査が実施されているが、いずれも小字名である「括渡」を冠した野多目括渡遺跡として報告されている。2008(平成20)年に野多目C遺跡群から、野多目C遺跡へ名称変更がなされた。本報告にあたり、これまでの調査と報告書名を整理し、調査次数は「野多目C遺跡」第6次調査、書名は第5次調査が未報告のため、『野多目括渡遺跡4』から引き続き、『野多目C遺跡5』とした。

本遺跡周辺の歴史を概観すると、旧石器時代からはじまり、現代に至っている。福岡平野において旧石器時代の包含層が確認された遺跡は少なく、博多区諸岡遺跡や南区柏原遺跡、早良区有田遺跡のほか、本調査区の東側で実施された野多目括渡遺跡第1次調査で、三棱尖頭器・台形石器が出土する包含層が確認されている。また、野多目前田遺跡や那珂川右岸の臼佐遺跡では、ナイフ形石器が採集されている。

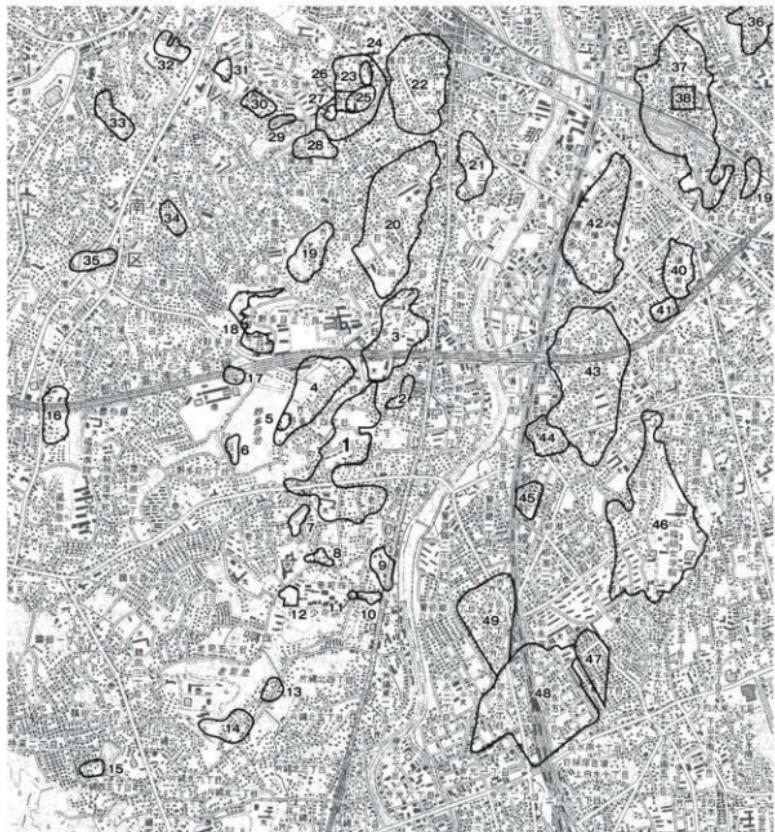
縄文時代になると遺跡は徐々に拡がりをみせるようになる。油山の裾部にあたる柏原遺跡では、早・晩期の集落跡が調査され、那珂川右岸には那珂川町深原遺跡、春日市門田遺跡・柏田遺跡等がある。また、野多目括渡遺跡第1次調査では、後期初頭の貯蔵穴・溝・旧河川が、第2次調査では後期初頭の貯蔵穴、第3次調査では晩期中頃の貯蔵穴、第4次調査では中期後半～後期初頭の河川、後期初頭の貯蔵穴・土坑が検出されている。本遺跡のやや北側に位置する野多目A遺跡では晩期末の水田跡が調査され、河岸段丘上に展開する集落跡の様相が判明しつつある。

弥生時代には福岡平野のいたるところに多くの大集落が分布する。とくに那珂川右岸に連なる須玖から那珂・比恵の丘陵上には門田・須玖岡本・臼佐原・那珂・比恵遺跡群などの遺跡群が展開し、「奴国」の中心を構成している。これと比較すると那珂川左岸地域の当該期の遺跡は少なく、南大橋遺跡、和田遺跡等の壇場墓地が知られているにすぎない。

古墳時代以降になると、脊振・油山山系の裾部には、多くの古墳が築造されるようになる。周辺では、堅穴系横口式石室をもつ老司古墳や卯内尺古墳のほか、老松神社古墳群や野多目古墳群も近い。那珂川上流域に多くの前方後円墳が展開し、本遺跡西方の油山山系には多くの古墳群が分布する。また、集落跡も急速に増加しており、野多目括渡遺跡第1次調査では、多くの堅穴住居跡が確認されており、この周辺に集落が展開していたと考えられる。

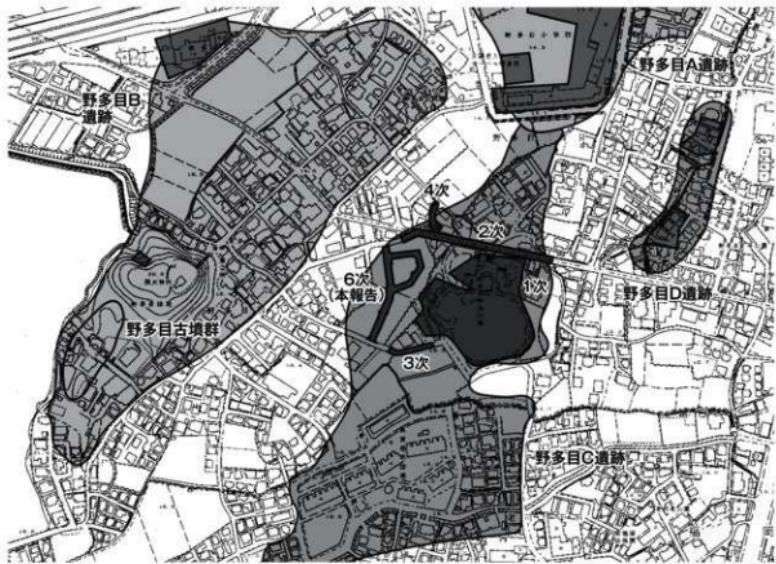
古代には、三宅庵寺・三宅瓦窯跡・老司瓦窯跡等がある。南区三宅はこれまで、耶ノ津官家の所在地に比定されていたが、1984年に博多区比恵遺跡群で6世紀後半に營まれた倉庫群が検出され、これを那ノ津官家と考える説も浮上している。

中世以降については、本遺跡の北側に位置する野多目A遺跡において実施された発掘調査によって、当該期の様相が少しずつ明らかになってきている。1次調査では、13～14世紀の水田(溝・井堰・欄)が、2次調査では、中世の溝・掘立柱建物、3次調査では中世の溝・掘立柱建物、近世の溝が検出されている。4次調査では、中世末～近世初頭の集落(掘立柱建物・溝・土壤)が、6次調査では、中世前期の集落(13世紀前後の掘立柱建物・溝・土壤墓・集石遺構)、7次調査では、中世末期～近世前期の集落跡が検出されている。中世から近世にかけて本遺跡周辺は水田化され、集落が点在していた様子が窺える。

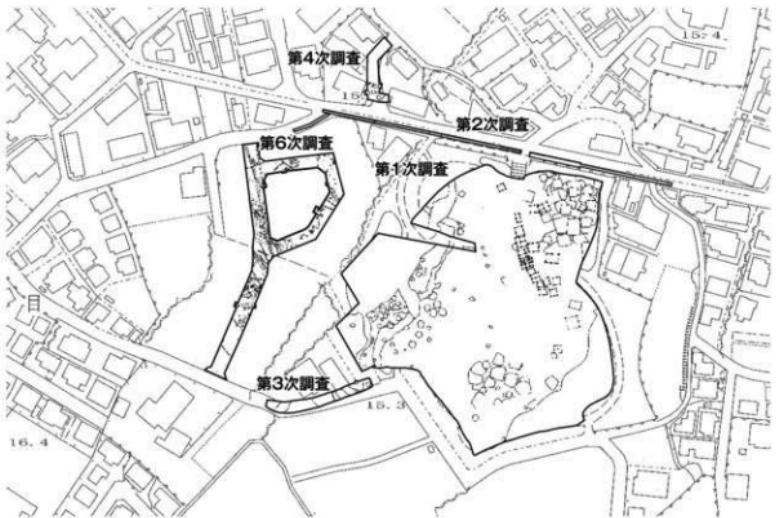


- | | | | | | |
|-----------|-----------|------------|------------|-------------|------------|
| 1 野多目C遺跡 | 2 野多目D遺跡 | 3 野多目A遺跡 | 4 野多目B遺跡 | 5 野多目古墳群 | 6 野多目浦ノ池遺跡 |
| 7 卿内尺古墳群 | 8 老司A遺跡 | 9 老司B遺跡 | 10 老松神社古墳群 | 11 老司瓦窯跡 | 12 老司古墳 |
| 13 老司池B遺跡 | 14 老司池A遺跡 | 15 鶴田遺跡 | 16 花畠C遺跡 | 17 野多目浦ノ池古墳 | 18 和田B遺跡 |
| 19 和田A遺跡 | 20 三宅B遺跡 | 21 三宅C遺跡 | 22 大橋E遺跡 | 23 大橋C遺跡 | 24 大橋D遺跡 |
| 25 三宅A遺跡 | 26 三宅廢寺 | 27 三宅岩野瓦窯址 | 28 和田藏池遺跡 | 29 八田池遺跡 | 30 若久C遺跡 |
| 31 若久B遺跡 | 32 若久A遺跡 | 33 上若久遺跡 | 34 新開池遺跡 | 35 屋形原遺跡 | 36 諸岡A遺跡 |
| 37 井尻B遺跡 | 38 井尻廃寺 | 39 井尻C遺跡 | 40 寺島遺跡 | 41 笠抜遺跡 | 42 横手遺跡 |
| 43 日佐遺跡 | 44 上日佐遺跡 | 45 高根遺跡 | 46 苏永原遺跡 | 47 弥永遺跡 | 48 警弥郷B遺跡 |
| 49 警弥郷A遺跡 | | | | | |

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点位置図① (1/5,000)



第3図 調査地点位置図② (1/2,000)

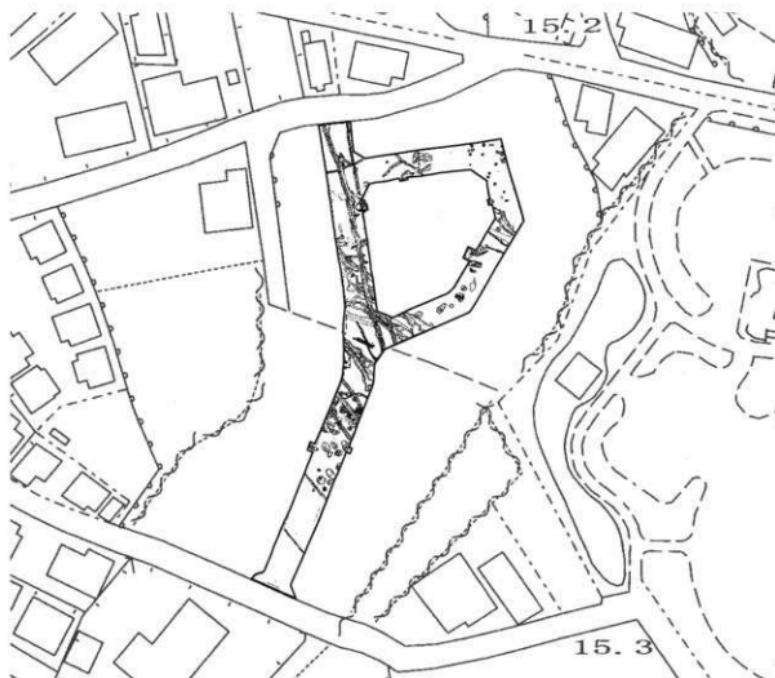
III. 調査の記録

1. 概要

1) 調査の経過

野多目C遺跡第6次調査地点は、福岡市南区野多目4丁目277、278-1、285-1、286、287-1地内に所在する。調査前は畠地で、周辺道路よりも低い場所であった。周辺道路の標高は15.2～15.3mである。調査範囲の中央付近にはブロック塀があり、南側は北側と比較して約0.2m高い状況であったが、これは南側が高く、北側が低いという旧地形を反映しているものである。調査の対象は「I. - 1調査に至る経緯」にも記したように、道路建設部分の1,076.94m²であったが、周辺の安全対策等のため、実際の調査面積は1,039.15m²となった。

発掘調査は、平成26年1月6日に開始した。調査区北側道路への取り付き部分の位置が確定していないこともあり、調査範囲の南側を先行して調査し、その後、設計の決定を待って残る北側部分の調査を行うこととした。調査はまず、重機による表土剥ぎ取りを行い、併行して機材の搬入や環境整備等を行った。重機により地表下約40cmの淡黄灰粘質色シルト～黄白色粘質土まで掘り下げ、人力による遺構検出や掘削、精査を行い、適宜、写真撮影や1/10・1/20の遺構実測図等を作成し記録



第4図 調査区位置図 (1/1,000)

した。調査区の全景写真については、有限会社空中写真企画にラジコンヘリによる空中写真撮影を委託し、4月9日に調査区の全景写真撮影を実施した。その後、4月12日に遺構の記録等の作業および重機による埋め戻しを終了し、4月16日には発掘機材等を撤収して、第6次調査の全ての工程を完了した。

2) 調査の概要と基本層序

第6次調査地点は、ほとんど起伏のない地形であるが、南側から北側に向かってわずかに低くなっている。今回の調査は、宅地造成が行われる申請地の中に建設される市道編入予定の道路部分のみが対象であったため、南側の直線状の部分（以下、南半部という）と、北側のいびつな五角形状の部分（以下、北半部という）の大きく二つに分けて調査を実施した。

遺構は、調査区の南端付近ではほとんど検出されず、南半部中央付近から北側に分布する。調査では、土坑、小穴、溝、旧河川等の遺構を検出した。また、南半部の北側から北半部の西側には、灰褐色砂質土～褐色砂色土の遺物包含層があり、弥生時代～中世にかけての遺物が出土したが、包含層の厚さは5～10cm程度である。

ここで、調査区の基本的な層序について、第5図に示した調査区南半部東壁の土層略図に基づいて記述する。標高約15.1～15.3mの表土下に耕作土がほぼ水平に堆積し、その下に鉄分・マンガンが沈着する灰白色砂、淡灰色粘質土（旧耕作土）、明黄色粘質土（床土）と続き、その下が、遺構検出面である淡黄灰色粘質シルト～黄白色粘質土となる。遺構検出面の標高は約14.7～14.9mである。南半部の南側においては、遺構検出面である淡黄灰色粘質シルト～黄白色粘質土を一部トレンチ状に掘り下げ、下部に遺構等がないか確認を行ったが、検出はされなかった。しかし、北半部の中央近くで確認した自然流路は、上面の遺物包含層を除去し、わずかに遺構検出面である淡黄灰色粘質シルト～黄白色粘質土を掘り下げたところで確認できた。このことを考慮すると淡黄灰色粘質シルト～黄白色粘質土の下層にも遺構等が存在する可能性がある。今回の調査では、全面的に遺構検出面以下まで掘り下げて確認することができず、不十分な調査となってしまったことは否めないが、このことは今後、周辺の確認調査等を実施する場合には考慮しておく必要がある。

2. 遺構と遺物

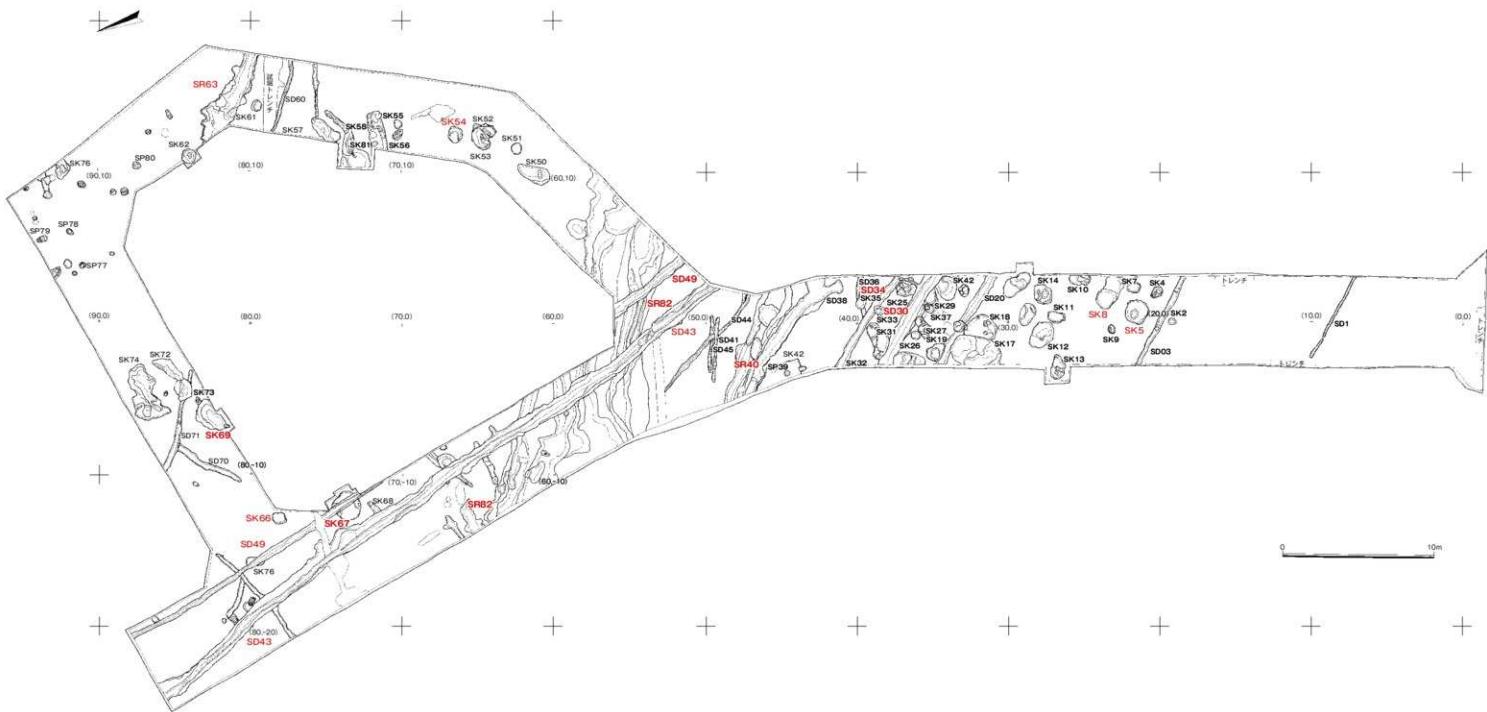
ここでは、調査時に検出した遺構の種別ごとに報告する。遺構には種別に関わらず通し番号を付しており、欠番はあるが重複はない。この遺構番号と遺構の種別を示す略号とを組み合わせて表記する。遺構の分布・配置については第6図に示したとおりである。

1) 土坑（SK）（第7～9図）

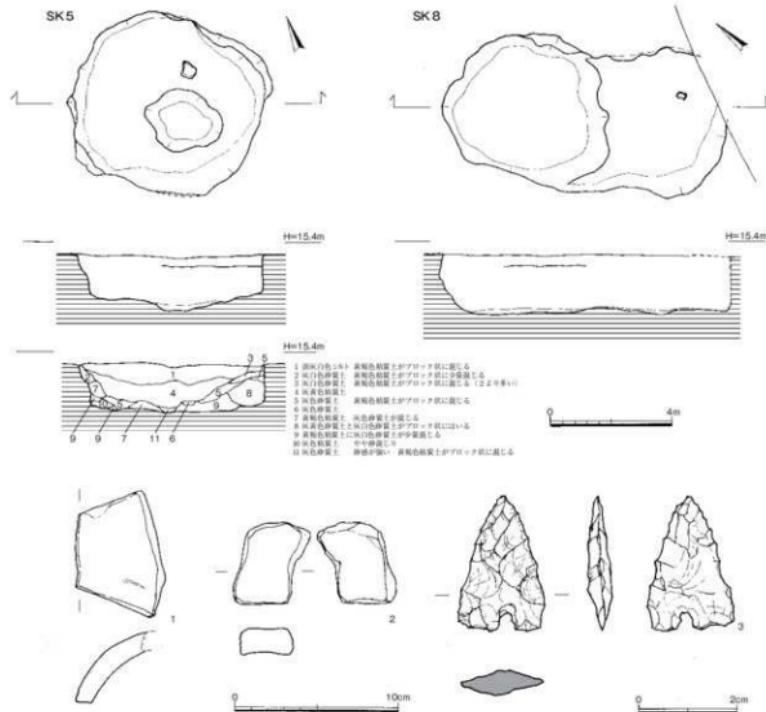
調査では、多くの土坑を検出したが、遺物が出土したものは少數に限られ、時期を特定することができたものは多くない。出土遺物から概ね、南半部には中世の土坑が多く集中し、北半部には縄文時代中期～後期、弥生時代中期初頭頃の遺構が分布すると考えられるが、これらの数は少ない。



第5図 調査区基本土層略図（1/10）



第6図 調査区全体図 (1/250)



第7図 SK5・8実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/1・1/3）

SK5（第7図）

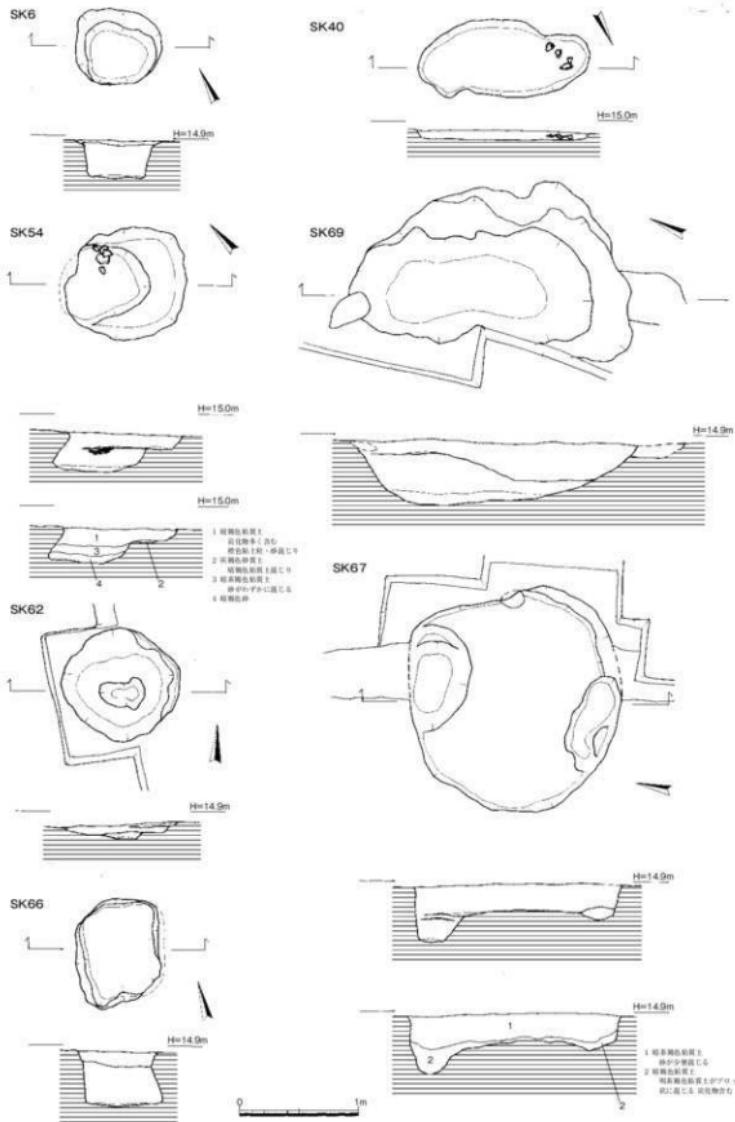
南半部の南側に位置する。平面形は円形を呈し、南北軸1.5m、東西軸1.7m、深さ0.25~0.4mを測る。壁面は概ね垂直に近く掘り込まれているが、一部袋状を呈する部分もあり、北東側および西側は崩落によるものか、段状になる部分もある。埋土は、淡灰色シルト、灰白色砂質土に黄褐色粘質土がブロック状に混じるもののが上部に堆積し、下部には灰黄色粘質土、黄褐色粘質土、灰色粘質土に砂質土や砂が混じるもののが堆積する。出土遺物としては、底面に近い部分で丸瓦が一点出土したのみである。出土遺物から、中世後半の遺構であると考えられる。

出土遺物（第7図）

1は、SK7から出土した丸瓦片である。灰色を呈し、胎土は緻密で、径1mm程の砂粒を少量含む。焼成は良好であるが、全体に磨滅している。上面には繩目叩き痕が残り、下面是ナデ調整されている。

SK8（第7図）

調査区南半部南東側に位置する。調査区東壁の際にあり、一部は調査区外へと続いている。平面形はやや歪な長楕円形を呈し、南北軸約2.2m、東西軸約1.1~1.2m、深さ約0.5mを測る。壁面はほ



第8図 SK 40・54・61・62・67・69 実測図 (1/40)

は垂直に掘り込まれているが、一部袋状を呈する部分もある。埋土は、灰色砂質土に黄褐色粘質土がブロック状に混じる。埋土中からは混入品と考えられる石鎚が出土し、底面に近い場所から、瓦片が出土した。出土遺物から、中世後期の遺構と考えられる。

出土遺物（第7図）

2は平瓦片で、黄褐色を呈し、やや軟質である。胎土はやや緻密で、径1mm程の砂粒をわずかに含む。全体に磨滅が著しく、調整等は不明である。3は凹基の打製石鎚で、姫島産黒曜石を素材とする。二次調整は粗い押圧剝離が施される、全体に磨滅が著しい。

SK 40（第8図）

調査区南半部北側に位置する。平面形は長楕円形を呈し、南北1.5m、東西0.65m、深さ7~8cm程を測る。上部は大きく削平されているものと考えられる。埋土は、暗灰褐色粘質土で、炭化物を含む。北端付近で、土師器の壺・坏が出土した。古代の遺構と考えられる。

出土遺物（第9図）

4・5は土師器壺の底部と考えられる。全体に磨滅が著しく、調整等は不明瞭である。低い逆台形状の高台が付く。胎土は淡橙色を呈し、直径1~5mm程の砂粒を多く含み、粗い。

SK 49（第7図）

調査区北半部北側に位置する。平面形は歪な楕円形を呈し、南北0.7~1.5mで東側が広がっている。東西2.5m、深さ0.45~0.55mを測る。埋土は、あまり縮まらない黒褐色砂質土である。炭化物が多く混じっていたが、遺物等は出土しなかった。

SK 54（第8図）

調査区北半部の東側に位置する。平面形は隅丸方形に近い円形を呈し、二段掘りである。南北0.9m、東西1.05m、深さは東側の浅い部分が0.1m、西側の深い部分が0.30~0.35mを測る。西壁は袋状を呈する。形状から貯蔵穴とみられるが、規模が小さく疑問は残る。埋土は、上部から炭化物・橙色粘土粒を多く含む暗褐色粘質土、暗褐色粘質土混じりの灰褐色砂質土、暗茶褐色粘質土、暗灰色粗砂が堆積する。レンズ状堆積で、自然に埋没したものとみられる。1層目の暗褐色粘質土の下層で縄文土器が少量であるがまとまって出土した。遺物は図示していないが縄文時代中期頃の粗製の阿高系土器と考えられる。

SK 61（第8図）

調査区北半部の北東側に位置する。平面形は円形を呈し、南北0.65m、東西0.7m、深さ0.3mを測る。断面形は逆台形で、壁面は真っ直ぐに掘り込まれ、底面はほとんど水平である。埋土は、暗灰褐色粘質土でしまりが強い。遺物は出土しなかった。

SK 62（第8図）

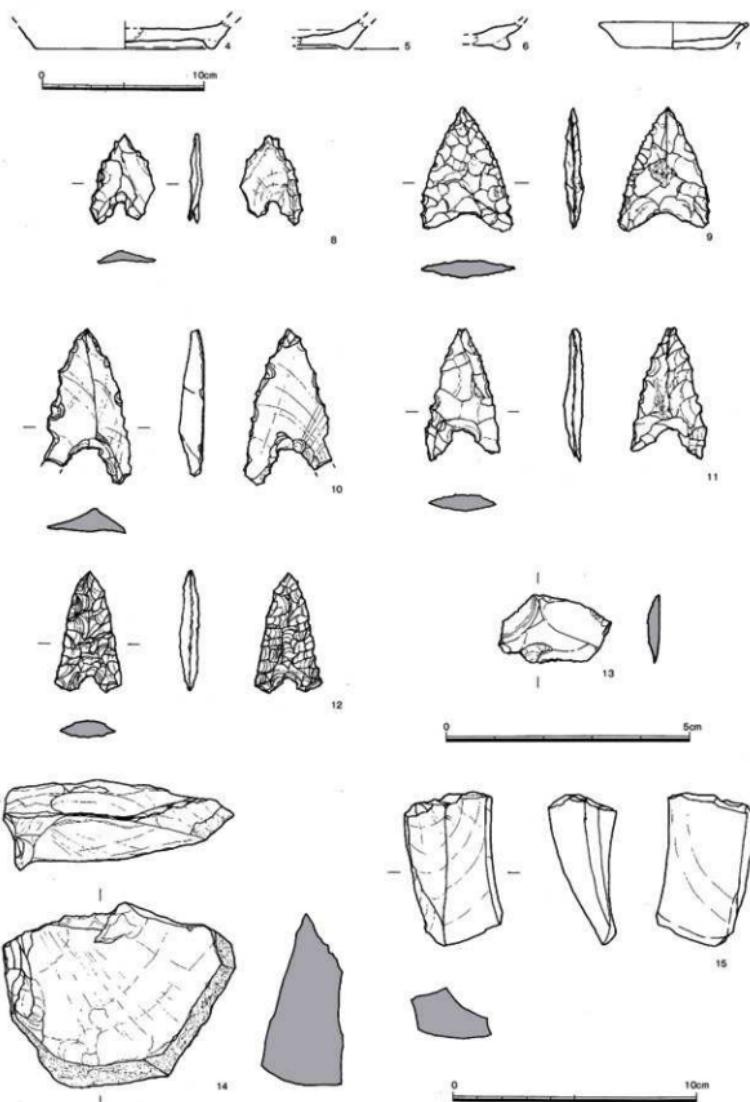
調査区北半部の北東側に位置する。平面形は円形を呈し、南北0.95m、東西1.0m、もっとも深いところで、深さ0.1m程を測る。中央部に向かって段状に掘り込まれている。埋土は暗褐色粘質土で、炭化物が混じる。底面に近い部分で、縄文土器が出土した。磨滅が著しく、図示していないが、縄文時代後期の粗製土器と考えられる。

SK 66（第8図）

調査区北半部の北西側に位置する。平面形は隅丸長方形に近い。南北0.85m、東西0.9m、深さ0.45mを測る。壁面はほぼ垂直に掘り込まれるが、東側は袋状を呈している。埋土は、暗灰褐色粘質土で、炭化物を多く含んでいた。遺物は出土していない。

SK 67（第8図）

調査区北半部、北西側に位置する。平面形は円形を呈し、南北1.75m、東西1.8m、深さ0.2~0.25



第9図 SK 13・15・24・40・42・58・69・74 出土遺物実測図 (8-12は1/1・13～15は1/2・1/3)

mを測る。底面には北側に深さ0.45m、南側に深さ0.35mを測る楕円形の掘り込みがある。埋土は暗褐色粘質土で、炭化物を多く含んでいた。中央部やや東寄りでSD49と重複し、これによって壊されている。出土遺物はない。

その他土坑の出土遺物（第9図）

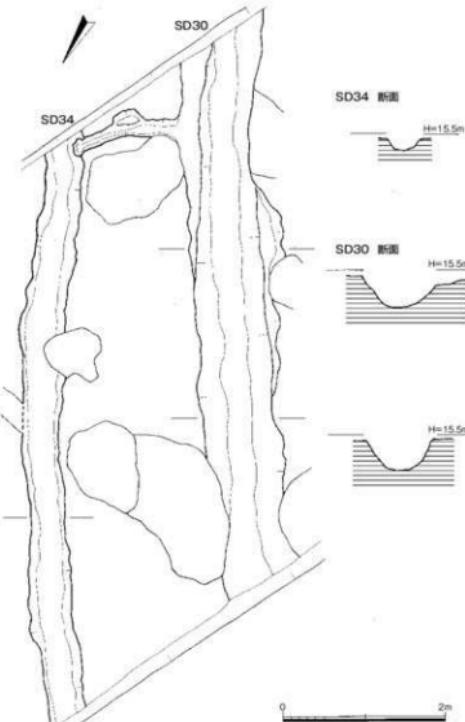
6はSK74から出土した、土器器の坏底部である。底部にはやや外に開く逆台形の高台が貼り付けられる。胎土は緻密で、橙色を呈し、焼成は良好である。7はSK15から出土した土器器皿である。底径6.2cmに復元でき、高さ15cmが残存する。胎土は緻密だが、灰褐色の粒子を多く含む。淡橙色を呈し、焼成は良好である。全体に磨滅するが、ナデ調整されている。

8はSK24から出土した、凹基の剥片鐵で、安山岩を素材とする。片脚が欠損している。9はSK13から出土した凹基の打製石鐵で、安山岩を素材とする。二次調整は粗い押圧剥離による。10・11はSK58から出土した。10は凹基の剥片鐵で、おそらく腰岳産黒曜石を素材とし、11は安山岩を素材とする。10は片脚が欠損している。

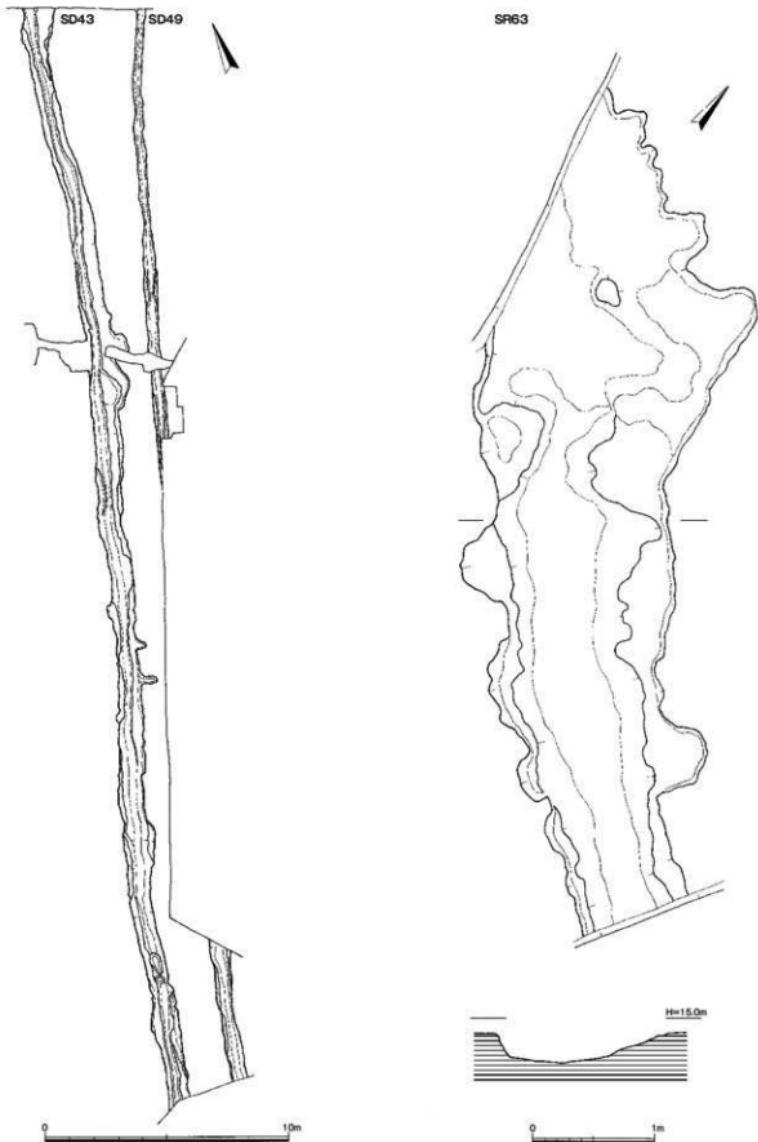
また側縁の押圧剥離は粗く、未製品とみられる。12はSK13から出土した凹基の打製石鐵で、安山岩素材をとする。二次調整は丁寧な押圧剥離が施されるが全体に磨滅している。13はSK74から出土した。安山岩を素材とし、端部に微細剥離痕がある。14はSK42から出土した安山岩の石核である。一部礫面が残る。15はSK69から出土した。砂岩質の縦長剥片で、打面調整の痕跡がある。

2) 溝 (SD)

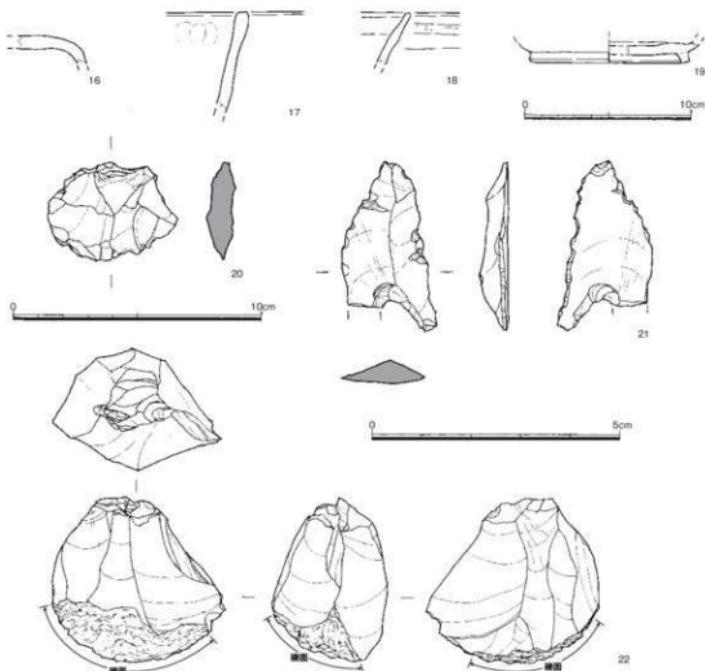
調査では、多くの溝を検出したが、遺物が出土したものは少数に限られ、時期を特定することができたものは多くない。だが、出土遺物や埋土の色調・状況から推測すると、南半部には中世の溝が多く集中し、北半部には古代あるいは中世の溝が分布すると考えられる。溝は東西方向のもの、南東から北西方向のもの、南北方向のものがある。調査区の南半部に位置するSD1・3・20・30・34・38・44については、南東から北西方向に延び、また北半部のSD43・49はほぼ南北方向に延び、これらはそれぞれ並行する。同時期のものか判断は難しいが、何らかの意図・目的をもって掘削されたものであると考えられ、水田の水路や土地の区画等の機能が想定されよう。



第10図 SD 30-34 実測図 (1/60)



第11図 SD 43・49、SR 63 実測図 (1/40・1/200)



第12図 SD 38・43・49、SR 63出土遺物 (21～22は1/1・20は1/2・その他は1/3)

SD 30 (第10図)

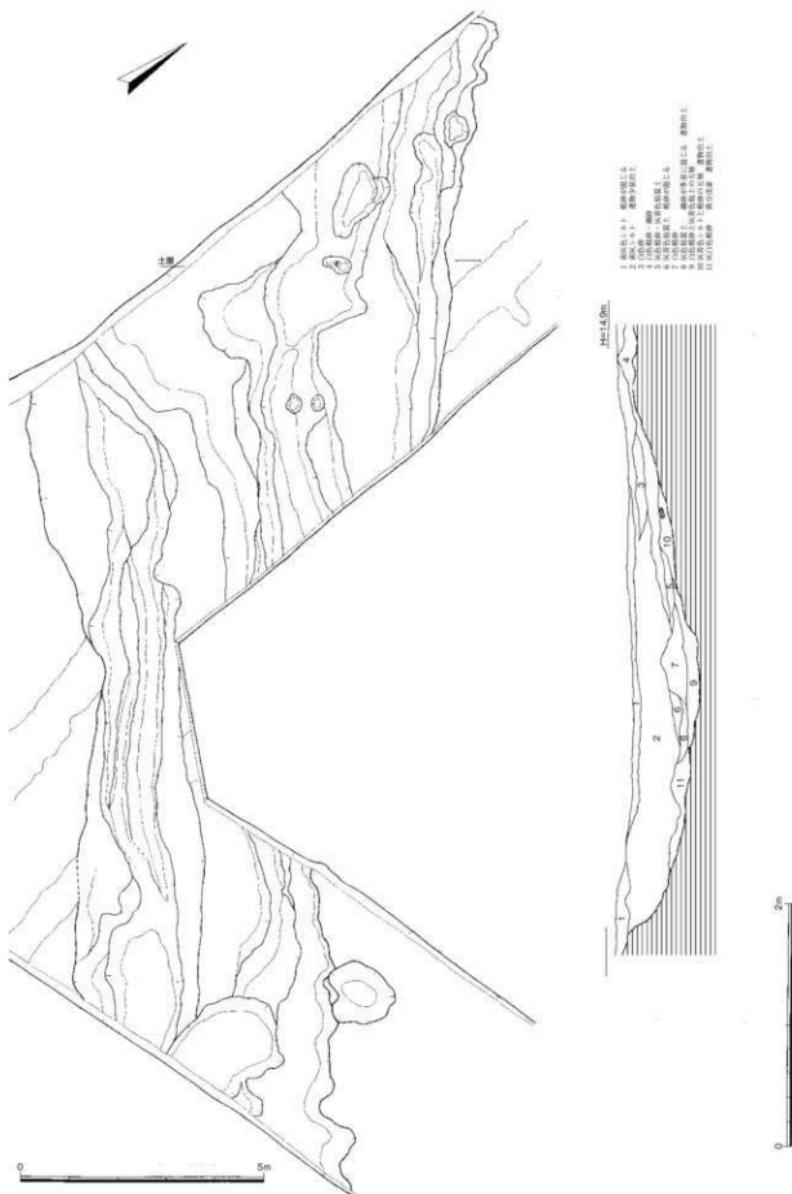
調査区の南半部中央付近に位置する。南東から北西方向に延び、幅1m、長さ6.9m分を検出した。両端は調査区外にさらに延びる。深さは概ね0.35～0.4mを測る。埋土は灰黄色粘質土、明灰色シルトに粗砂が混じる。激しく水が流れたような痕跡はない。東端付近には、SD 34に向かって浅い溝状の痕跡があり、SD 34との関連が想定できる。例えば、SD 30の水量が多い場合には越流し、SD 34に流れ込む、といった機能をもっていた可能性がある。遺物は出土しなかったが、埋土の状況等から推測すると中世の所産と考えられる。

SD 34 (第10図)

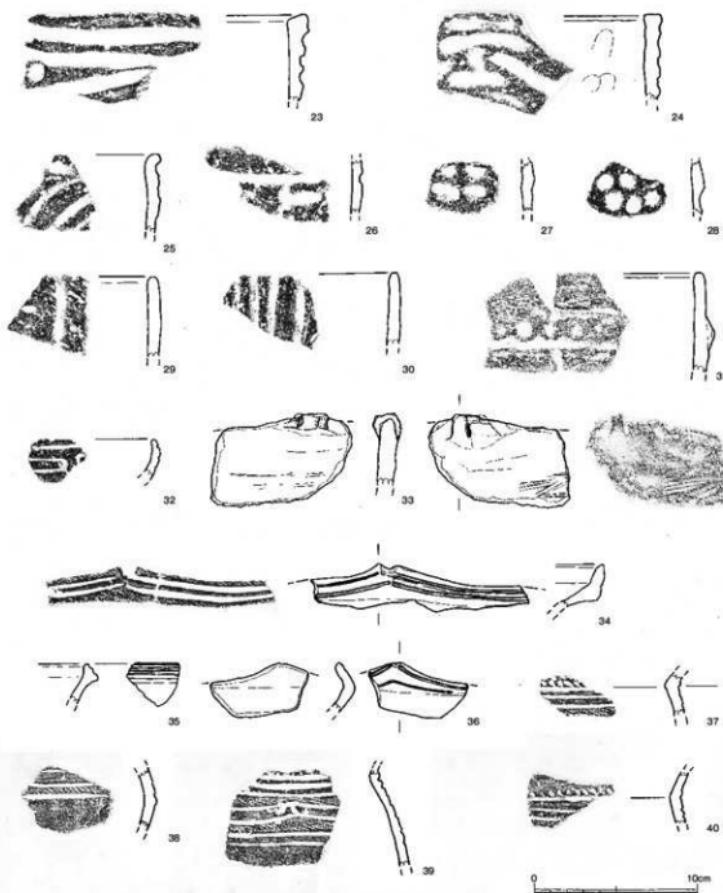
調査区の南半部中央付近に位置する。SD 30とほぼ並行している。幅0.4～0.55m、長さ約7m分を検出し、両端は調査区外に延びる。深さは0.2m程度で、SD 30と比較すると浅い。埋土は灰黄褐色粘質土にわずかに粗砂が混じる。遺物は出土していないが、上記のように、少なくともSD 30と同時期に機能していたとみられる。

SD 43 (第11図)

調査区の中央付近に位置し、SD 49とほぼ並行し、わずかに蛇行しながら、ほぼ南北方向に延びる。長さ約45m分を確認し、両端は調査区外へさらに延びる。幅0.8～1.6m、深さ0.3～0.5mを測る。



第13図 SR 82 実測図 (1/100・1/40)

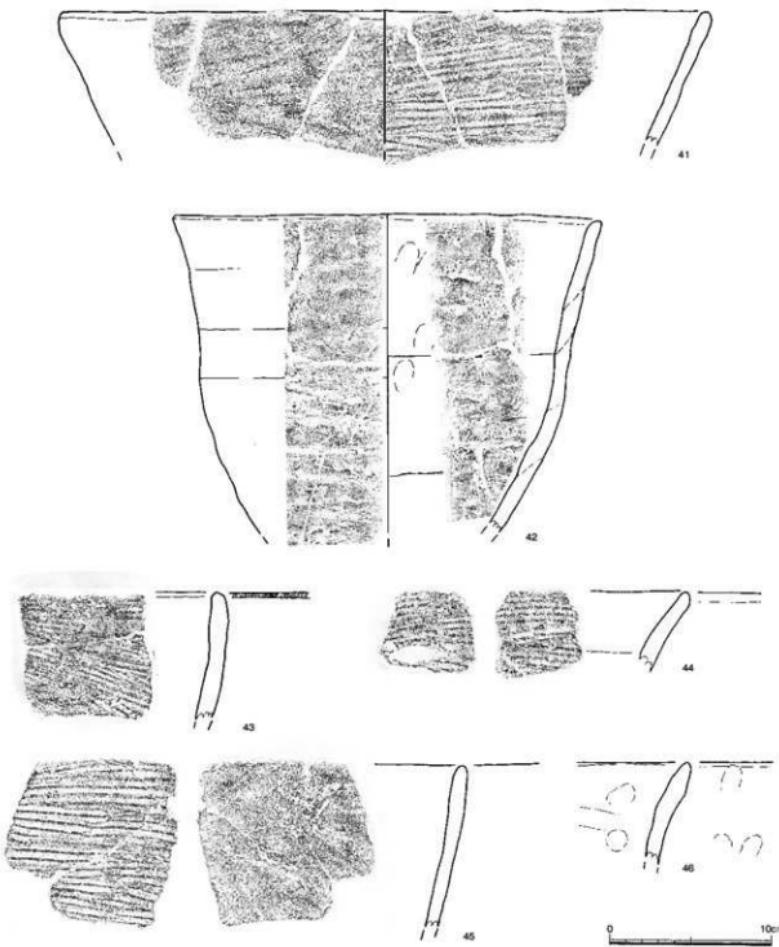


第14図 SR 82出土遺物実測図① (1/3)

埋土は、おもに灰褐色粘質土で、わずかに粗砂が混じる。S D 49も同様だが、南側に延長するとおそらく、調査区南半部で確認された南東～北西方向に延びる溝と重複することになるが、その関係性は不明である。古代から中世にかけての土師器や須恵器、また混入品とみられる石器類が出土した。出土遺物から中世後半の所産と考えられるが、判然としない。

出土遺物（第12図）

16・17・20は、S D 43から出土した。16は須恵器で、小型の壺等の肩部と考えられる。胎土は緻密で灰色を呈する。17は土師器壺の口縁部で、端部は平坦に整えられる。胎土は粗く、黄橙色を呈し、



第15図 SR 82出土遺物実測図② (1/3)

径1~3mm程の砂粒を多く含む。全体に磨滅が著しいが、全面にナデ調整が施され、内面には指オサエ痕が残る。20は安山岩の剥片である。一部を削器として使用している可能性がある。

SD 49 (第11図)

調査区の中央寄りに位置し、SD 43とほぼ並行する。南半の大部分は調査区外となっているが、長さ23.5m分を確認した。両端は調査区外へさらに延びている。幅0.4~0.8m、深さは30~45cm

程を測る。南側の方が幅広く、北側ほど狭くなっている。SK 67と重複し、これよりも新しい。埋土は灰褐色粘質土で、わずかに粗砂が混じる。埋土中からは、瓦や土師器片が出土したがごく少量である。ほかに、混入品とみられる打製石鐵や剥片等の石器類が出土した。時期は判然としないが、出土遺物から中世後半頃と考えられる。

出土遺物（第12図）

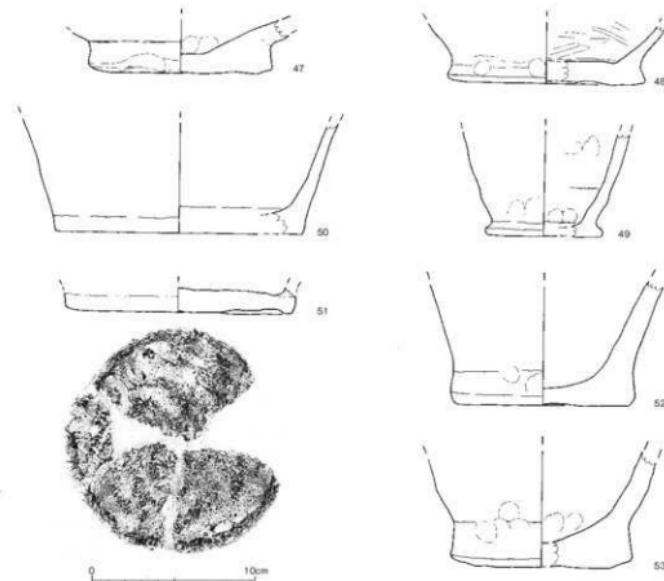
21は黒曜石製の剥片鐵で混入品とみられ、片脚が欠損する。抉り部分の加工は行われているが、側縁部の二次調整は一部になされているだけで、未製品と考えられる。

その他溝の出土遺物（第12図）

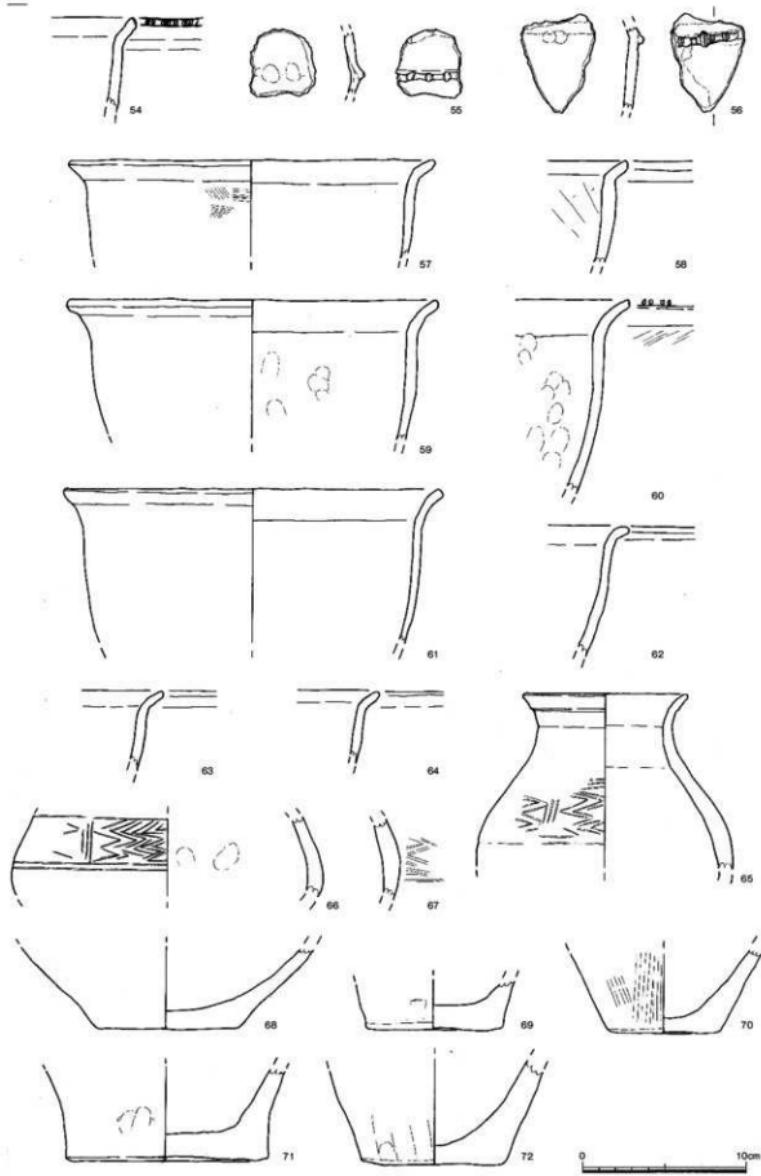
22はSD 38から出土した。ガラス質安山岩の石核で、一部に礫面が残る。細い縦長剥片をはぎ取っているようであり、打面調整を行った痕跡もある。細石核である可能性があろう。

3) 自然流路（SR）

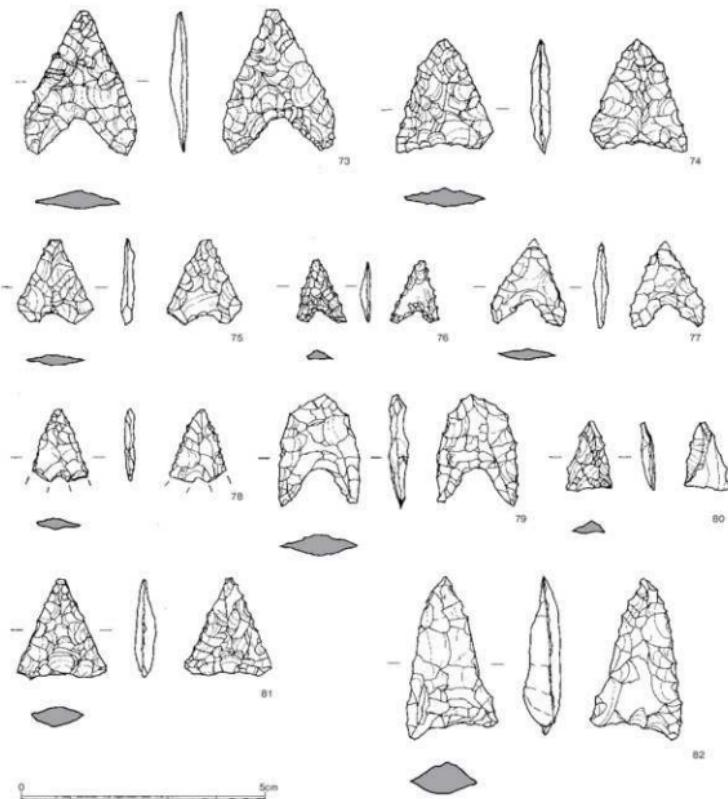
調査では、3条の自然流路を確認したが、これらはいずれも南東から北西方向に流れている。本調査区の東側で実施されている野多目括波遺跡第1次調査では、調査区の西側で自然流路が数条確認されているが、これらは北あるいは北西に流れているものと考えられる。今回の調査で確認した自然流路は第1次調査で確認された自然流路から派生する、支流のようなものであるとみられる。SR 82については、水量も多く、水流も速かったことが窺えるが、SR 42・SR 63については、深さも浅く、その堆積状況から、常に水が流れているようなものではなく、一時的な流れであったものと考えられる。



第16図 SR 82 出土遺物実測図③ (1/3)



第17図 SR 82出土遺物実測図④ (1/3)



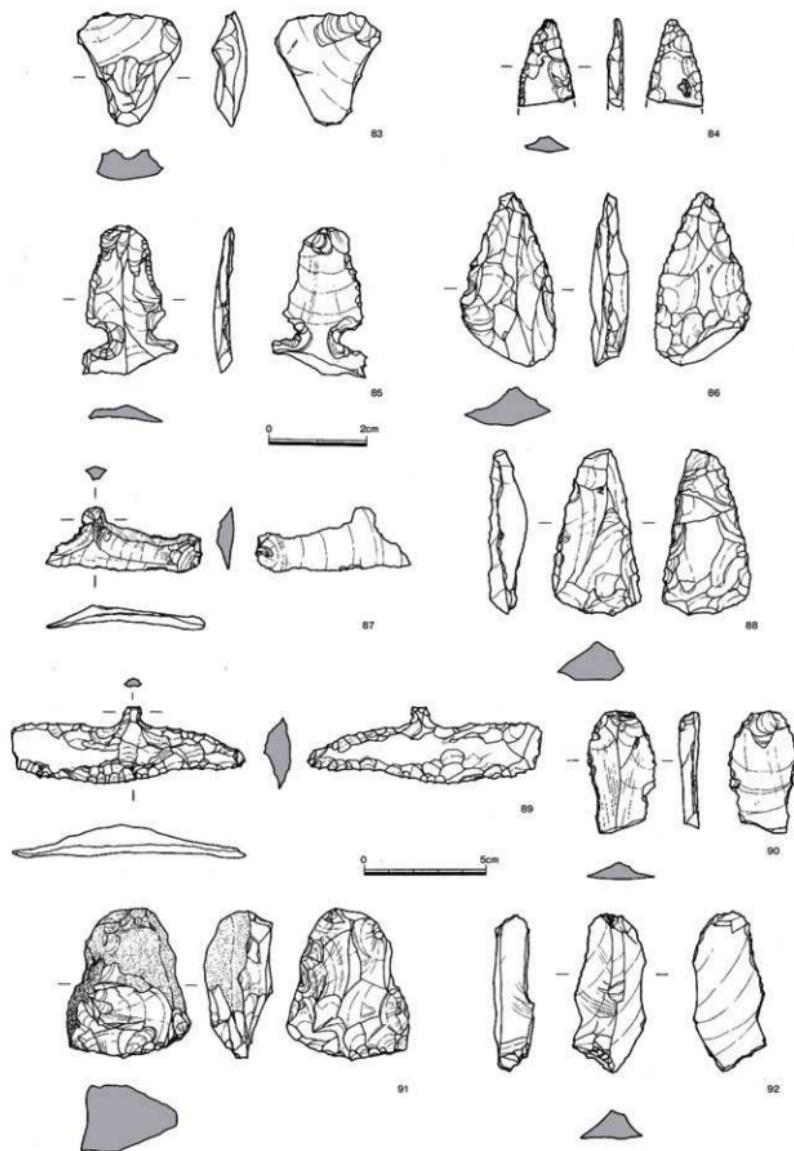
第18図 SR 82出土遺物実測図⑤ (1/1)

SR 63 (第11図)

調査区の北半部東側に位置する。南東から北西方向に延び、長さ6.5m分を確認したが、両端は調査区外に延びている。幅は1~2.3m程、深さは0.2~0.25m程で浅い。埋土は、灰色粘質土～シルトで、わずかに粗砂が混じる。出土遺物は、土師器片・須恵器片・瓦片等がごく少量出土し、混入とみられる黒曜石・安山岩の剥片が出土した。出土遺物から古代から中世にかけての時期が考えられるが明確ではない。

出土遺物 (第12図)

18は須恵器で、長頸壺の口縁部と考えられる。胎土は緻密で、灰色を呈する。全体に粗い回転ナデが施される。19は須恵器高台付壺の底部で、底径9.6cm、残存高1.4cmを測る。灰色を呈し、胎土は緻密で径1mm以下の黒色粒子を含む。底部中央部付近にはヘラ状の工具痕が残る。内面底部は不定方向のナデ、外面は回転ナデが施される。



第19図 SR 82出土遺物実測図⑥ (83・85・90は1/1・その他は1/2)

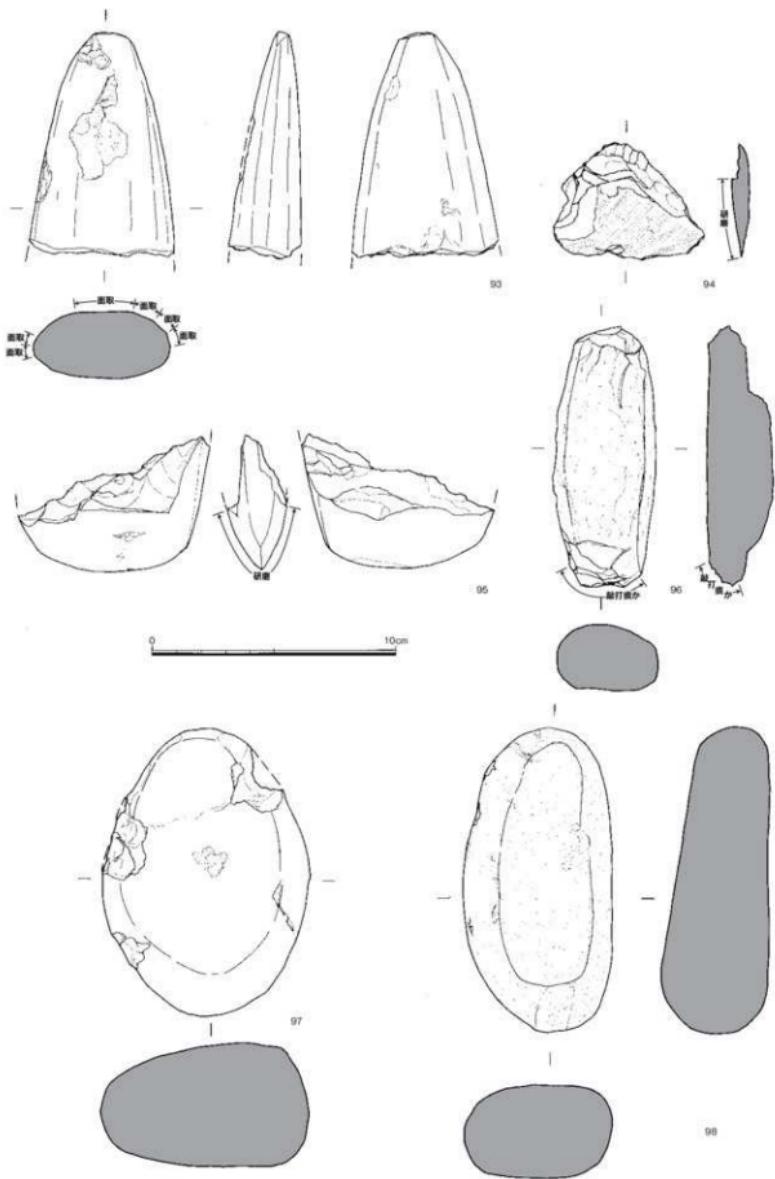
SR 82 (第 13 図)

調査区の北半部に位置し、南東から北西方向に延びる。長さ約 18 m、幅 6 m、深さ 1 ~ 1.2 m を測る。両端は調査区外にさらに延び、調査区の制約により検出できていない部分もある。遺構検出面である淡黄灰色粘質シルト～黄白色粘質土上面に堆積した遺物包含層を除去し、わずかに検出面を掘り下げたところで確認した。埋土は、粗砂を中心であり、堆積状況から流れが急だった時期とそうでない時期があることが分かる。遺物は、各層から出土しているが、特に上部の粗砂層と底面付近で多く出土し、遺物がまとまっている部分もある。旧石器時代から弥生時代前期後半頃にかけての土器・石器類が出土しており、とくに縄文時代中期から後期にかけての土器が多くみられる。

また、この流路の東側は、一部流込みのようになっていたと推測され、弥生時代前期の土器がまとまって出土し、明確な製品はないが木器も出土している。また、東側の北壁付近の底部には、写真図版 5 (27) に示したように、略円形のピット状の部分にイチイガシやシイの実と考えられる種子がまとまって出土しており、灰汁抜きのために種子を水にさらした場所であった可能性がある。

出土遺物 (第 14 ~ 22 図)

23 は阿高式土器の深鉢口縁部である。横位の凹線文と円形の凹点文が施される。赤灰褐色を呈し、胎土には滑石粉末や種子等の有機物を多く含む。全体に丁寧なナデ調整される。口縁部に凹点文がなく、阿高式土器の中でもやや新しい様相を呈する。24 は阿高式系土器の深鉢口縁部で、外面には横位の凹線文が施される。全体に丁寧なナデ調整で、内面には指オサエの痕跡が残る。橙褐色を呈し、胎土には滑石粉末、種子等の有機物が多く含まれる。25 は阿高式土器の深鉢口縁部で、口縁部付近に凹点文、その下には斜位の四専門が 3 条確認できる。橙色を呈し、胎土には滑石粉末、有機物を多く含む。全体に丁寧なナデ調整が施される。26 は阿高式系土器深鉢の口縁部に近い部分であると考えられる。赤褐～暗褐色を呈し、胎土には滑石粉末、種子等の有機物が多く混入される。横位の凹線文が施され、丁寧にナデ調整される。27・28 は阿高式系土器深鉢の口縁部付近と考えられ、円形に近い凹点文が施される。27 は茶褐色、28 は暗褐色を呈し、胎土には滑石粉末が多く混入される。全体に丁寧にナデ調整されている。29・30 は坂の下式土器の深鉢口縁部とみられ、縱位の凹線文が施される。30 の凹線文はやや細い。淡赤褐色～淡橙色を呈し、胎土には滑石粉末、有機物が多く混入されている。31 は深鉢の口縁部と考えられ、口縁部下部に断面三角形の低い突帯が貼付される。突帯には梢円形の刻目がある。暗褐色を呈し、胎土はやや粗く、径 1 mm 程の砂粒を多く含む。32 は深鉢の口縁部とみられ、全体に丁寧にナデ調整され、沈線文が施される。淡橙色を呈し、胎土は緻密で、径 1 mm 程の砂粒を含む。33 は南福寺式土器と考えられる深鉢口縁部である。口縁部には、橋状把手に似た装飾のための粘土が貼付されている。茶褐色を呈し、胎土には 1 ~ 2 mm 程の砂粒を含む。内外面ともにナデ調整だが、一部に細い条痕が残る。34 は西平式土器の深鉢口縁部で、やや外に聞く口縁部外面には、2 条の沈線とその上下に縄文が施される。暗褐色を呈し、胎土には径 1 mm 程の砂粒を含む。35 は磨消縄文土器深鉢の口縁部で、黒褐色を呈し、胎土はやや緻密で、径 1 mm 程の砂粒を少量含む。36 は三万田式土器と考えられる深鉢口縁部で、内傾する口縁部外面に沈線文が施される。淡橙色を呈し、胎土は緻密である。37・40 は西平式土器の深鉢で、肩部から口縁部への立ち上がり付近の破片である。外面には 3 条の沈線文と刻目が施される。暗褐色を呈し、胎土には径 1 mm 程の砂粒を含む。全体にナデ調整される。38・39 は三万田式土器の深鉢で、38 は胴部、39 は肩部～胴部片である。外面には沈線文と、その間に縄文が施される。39 は口縁部への立ち上がりの届曲部に刻目がある。41～46 は柵文粗製土器深鉢である。43・44 は内外面、41・45 は外面に条痕が残る。41・45 の外面は板状の工具による横方向のナデ調整が施される。43 の外面には煤が付着する。46 は



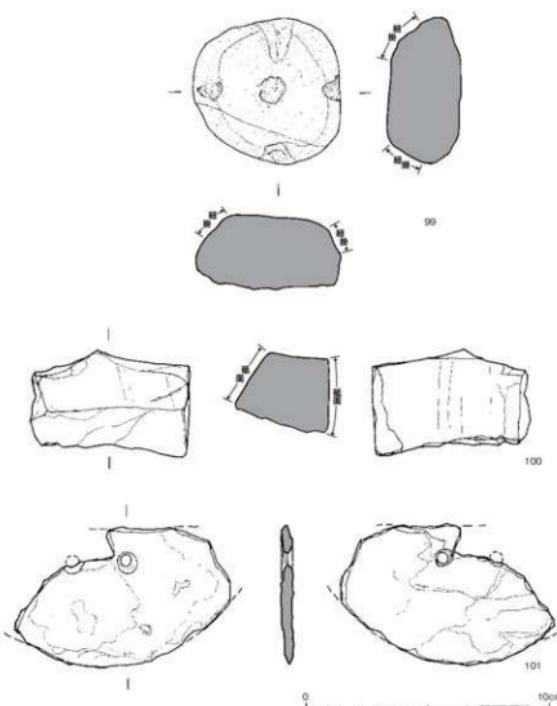
第20図 SR 82出土遺物実測図⑦ (1/2)

内外面とも指オサエ痕が残る。47～50は阿高式系土器の深鉢底部か。48については、内面に条痕があり、黒川式土器粗製深鉢の可能性がある。50の胎土には滑石粉末が混入されている。47・48・49の内外面には指オサエ痕が残る。51は粗製深鉢の底部か。内側がやや凹み、内外面とも指オサエ痕が残る。52・53は黒川式土器の深鉢底部か。52は外面、53は内外面に指オサエ痕が残る。52の内面には煤が付着する。

54～56は夜白式土器の甕口縁部および口縁部付近の破片である。全体に磨滅が著しい。54の口唇部には浅い刻目が施される。55・56には刻目突帯が貼付される。暗褐色～黄褐色を呈し、径1～2mmの砂粒、雲母を含む。

57～61は板付I式土器の甕口縁部である。60の口唇部には刻目が施される。58の内面には板状工具によるナデ痕跡、59・60の内面には指オサエ痕が残る。58の外面には煤が付着している。61～64は板付式土器甕の口縁部である。全体に磨滅が著しい。65～67は板付II式土器の壺である。遠賀川以東、綾羅木式土器の可能性がある。肩部を横位の2条の沈線と3条の縦位の沈線で区画し、その内側を羽状文で埋めている。全体に磨滅が著しいが、赤色顔料が塗布されている。68～72は弥生土器壺・甕の底部で、68は前期、47は後期前半頃か。70の外面には縦方向の刷毛目、71・72の外面には指オサエ痕が残る。

73～82は、打製石鏨で、73・74・76・80・81は黒曜石製、75はガラス質安山岩製、77・78・79・82は安山岩製である。80は主要剥離面を残しており、未製品と考えられる。83は百花台型の台形石器で、全体に磨滅している。黒曜石製。84は安山岩製の尖頭器で下部は欠損している。85はつまみ石器で、縦長剥片に両端・両面から抉りを入れ、つまみ部を作り出している。両側縁に押圧剥離による二次調整が施される。86は安山岩製の石槍で、下部は折損する。87は黒曜石製の石匙で、一部縦面が残る。加工途中のようにも思われ、未製品である可能性がある。88は安山岩製のスクレイパーで、両側縁と下部を使用したものか。89は安山岩製の石匙である。縦長剥片を横位に用い、両面に



第21図 SR 82出土遺物実測図⑧ (1/2)

押圧剥離による二次調整が施される。90は微細剥離痕のある剥片で、黒曜石製である。91は安山岩製の櫛状器で、両刃のスクレイパーと考えられる。主要剥離面側と穂面の下部に粗い二次調整が施され、下端部にはさらに細かい調整が施されている。92は姫島産出黒曜石の縦長剥片である。93は玄武岩製の太型船刃石斧である。刃部は折損している。全体に丁寧な面取りが行われている。94は安山岩製の磨製石斧の刃部片と考えられる。丁寧な研磨が施されている。95は磨製石斧の刃部片で、大部分が欠損している。刃部の一部に研ぎ直しの痕跡がある。96は安山岩製の叩き石と考えられる。図の下端には敲打痕とみられる痕跡がある。97は砂岩製と考えられる磨石で、中心付近には敲打痕もみられる。98は砂岩製の磨石である。99は砂岩製の石錘と考えられ、図の上下左右に紐をかけたと思われる凹みがある。100は石英斑岩製の砥石で2面を砥面として使用している。101は頁岩製の石製槌揃具で、全体の半分程が残存する。全体に著しく磨滅している。

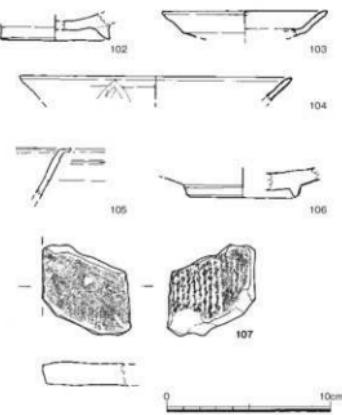
102～107については、SR 82上面で出土したもので、包含層に含めるべき遺物かもしれない。102は土師器の高台付底部である。底径6.6cm、残存高1.6cmを測る。橙色を呈し、胎土は緻密で、径1mm程の砂粒、赤色粒子を含む。全体にナデ調整が施される。103は龍泉窯系青磁盤で、釉は黄灰色を呈し、胎土は灰色で緻密である。口径10.1cmを測る。全体に貫入があり、磨滅も著しい。104は龍泉窯系の鍋連弁文青磁碗の口縁部で、口径16.4cmを測る。釉は青灰色を呈し、二次的に被熱している。105は白磁碗の口縁部である。口縁部は外に開き、平坦に整えられる。口縁下には断面三角形の低い突線がある。106は白磁碗の底部である。釉は淡灰色を呈し、胎土は灰白色で緻密である。高台と胴部の境には沈線が施される。内面底部は蛇の目釉剥ぎで、高台内・高台脇付は露胎である。高台脇付には目跡が残る。107は平瓦片で、灰色を呈し、胎土は緻密である。外面には繩目叩き痕、内面には布目压痕が残る。

4) 包含層

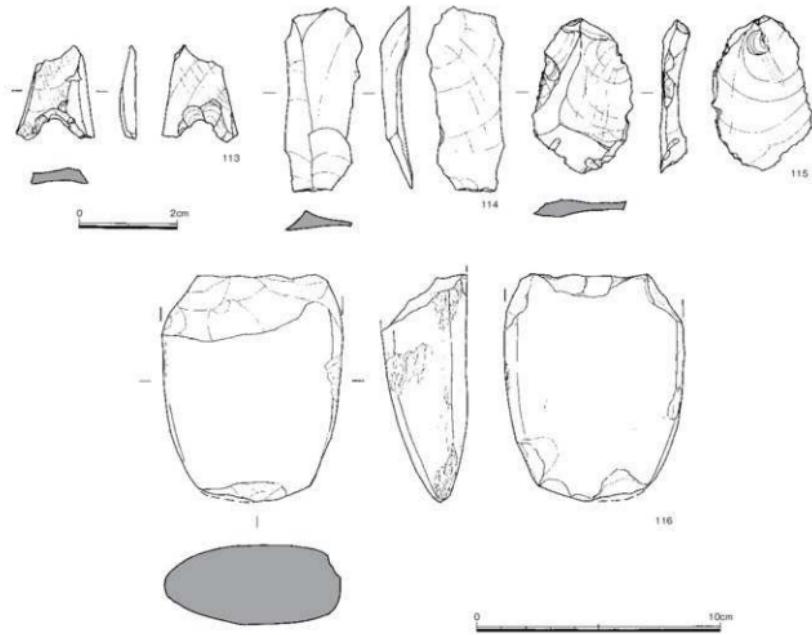
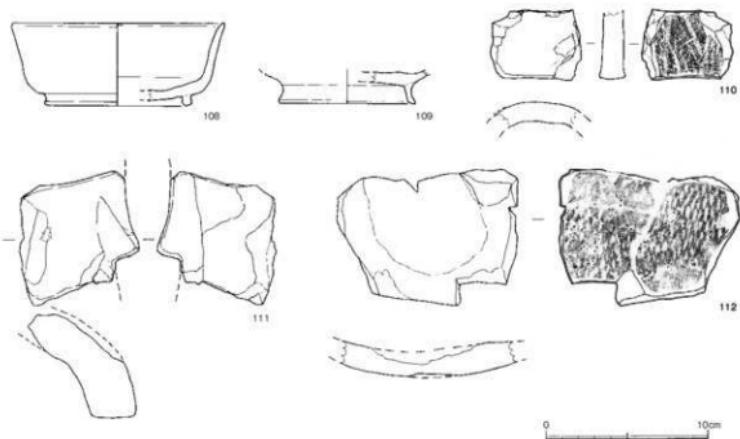
調査区の南半部の北側から北半部の西側には、遺構検出面である淡黃灰色シルト～黄白色粘質土の上面に灰褐色砂質土～褐色砂色土の遺物包含層があり、縄文時代から中世にかけての土器・土師器、須恵器、陶磁器、石器等の遺物が出土した。遺物量はそれほど多くはなく、コンテナ1箱程度の量である。包含層の厚さは5～10cm程度である。

包含層の出土遺物（第23図）

108-109は須恵器で、高台付杯である。108は口径13cm、底径8.5cmに復元でき、器高は5cmを測る。灰色を呈し、胎土は緻密で径1～3mm程の砂粒をわずかに含む。内面底部は不定方向のナデ、外面は横方向のナデが施される。109は底径8.4cmに復元でき、残存高は2.0cmである。青灰色を呈し、胎土は緻密である。高台はやや外に開き、端部は平坦に整えられる。内面底部は不定方向のナデ、外面は



第22図 SR 82出土遺物実測図⑨(1/3)



第23図 包含層・検出面出土遺物実測図 (113・114は1/1・115～116は1/2・その他は1/3)

回転ナデが施される。110・111は丸瓦である。110は灰色を呈し、胎土は緻密で径1mm程の砂粒を少量含む。端部はヘラ状工具で面取りがなされ、内面には布目圧痕が残る。111は灰白～淡橙色を呈し、やや軟質である。端部は面取りがなされ、内面には布目圧痕が残る。112は確認調査時に出土した平瓦で、灰白色を呈し、径1～3mm程の砂粒を少量含む。113は黒曜石製の剥片鎌で、抉りを入れ脚部が作り出される。114は黒曜石の縦長剥片である。115はガラス質安山岩製で、側縁に微細剥離痕があり、スクレイパーと考えられる。116は石斧の刃部である。上部は欠損し、全体に磨滅が著しい。使用痕もあり、伐採斧として利用され、折損したため廃棄されたものか。

IV. 結語

これまで、野多目C遺跡第6次調査の概要を述べてきた。調査で得られた成果について簡単ではあるがまとめたい。

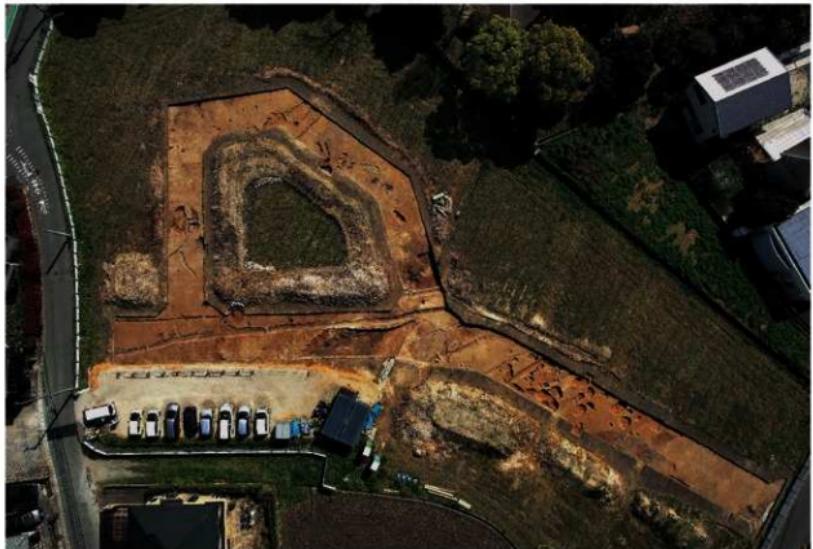
今回の調査は、宅地造成される調査対象地のうち、市道幅入予定の道路部分のみの調査であり、強調で、制約の多いものであった。そのため、敷地全体の遺構の抜がりや分布については把握できたとは言い難い。しかし、今回の調査と事前に実施された確認調査の成果、また周辺で実施されている既往の調査の成果からも、調査対象地全体に遺構が分布していることは明らかである。概ね、調査区の南半部には古代～中世の遺構が、北半部には縄文時代～古代と考えられる遺構が分布する傾向にある。

本調査区の東側で実施されている野多目拈渡遺跡1次調査では、調査区の東側に弥生時代～古代にかけての住居・建物跡が集中し、西側には自然流路に沿うように縄文時代の貯蔵穴群が形成されている。今回の6次調査では、明確に貯蔵穴と言えるものは確認できなかったが、縄文時代中期～後期にかけての土坑等の遺構は存在しており、SR 82と1次調査の西端付近で確認されている、北流する自然流路との間も当時なんらかの利用はなされていたと思われる。自然流路では、種子を水にさらしたような場所もあることから、居住域が明確にはなっていないが、その周辺部の土地利用の在り方の一端は確認できたのではないだろうか。また、弥生時代の住居等の遺構は確認できなかったが、縄文時代晚期～弥生時代前期の土器は一定量出土しており、1次調査地の東側一帯で確認されている弥生時代の住居跡や、北側の2次調査において確認されている水田跡等との関連も推察される。今回の調査で多く確認された古代～中世の土坑、溝については、水田に伴う給排水路や土地区分のための機能をもっていたものと考えたが、時期も含め、明確にはし得なかった。近隣に広がる野多目A遺跡等では、中・近世集落の調査が行われており、それらの成果とも合わせて検討することで、当時の様相をより明確にできるものと考えられるが、今後の課題としたい。

写 真 図 版



写真図版1



(1) 調査区全景（西から）



(2) 調査区全景（北から）



(3) 調査区南半部（西から）



(4) 調査区北半部（西から）



(5) 調査区西側（西から）

写真図版 3



(6) 調査前の状況（南西から）



(7) 調査区南半部北側（南西から）



(8) 調査区南半部中央付近（北西から）



(9) 調査区南半部南側（北西から）



(10) SK 5 北壁土層（南から）



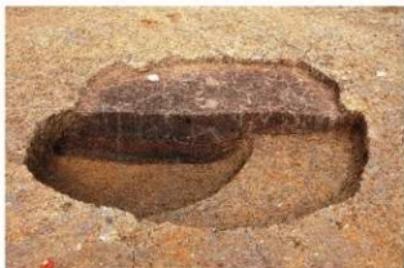
(11) SK 5 完掘状況（北西から）



(12) SK 8 完掘状況（北から）



(13) SK 40 完掘状況（北から）



(14) SK 54 北壁土層（南西から）



(15) SK 54 (南から)



(16) SK 54 遺物出土状況（南から）



(17) SK 62 遺物出土状況（東から）



(18) SK 66 東壁土層（北西から）



(19) SK 66 完掘状況（北西から）



(20) SK 67 東壁土層（西から）



(21) SK 67 完掘状況（南西から）



(22) S D 30・34 (南から)



(23) S D 43・49 (南から)



(24) S R 82 (北西から)



(25) S R 82 (西から)



(26) S R 82 西側 西壁土層 (南東から)



(27) S R 82 東側 種子出土状況 (南東から)



(28) S R 82 西側 遺物出土状況 (西から)



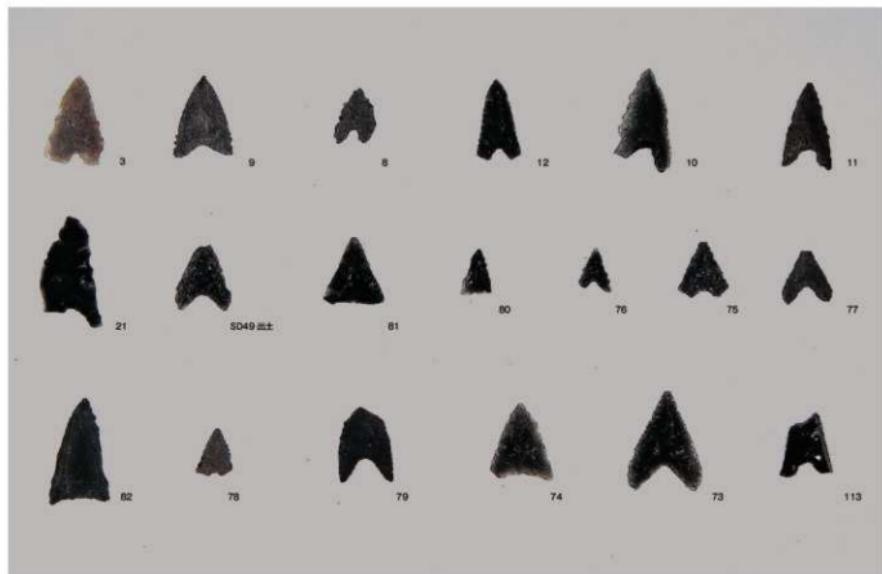
(29) S R 82 東側 遺物出土状況 (南から)



(30) 出土遺物①



(31) 出土遺物②



(32) 出土遺物③



(33) 出土遺物④

報告書抄録

ふりがな	のためいせき 5 - のためいせきだい6 じちょうさほうこく -							
書名	野多目C遺跡 5							
副書名	- 野多目C遺跡第6次調査報告 -							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1314集							
編著者名	吉田大輔							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2017年3月27日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
のためいせき 野多目C遺跡	ふりがな 福岡県福岡市 ふくおかしこくおかし 南区野多目4丁目 27,28,1,26-1, 28,26-1	40134	020147	130° 25' 22"	33° 32' 19"	20150106 ~ 20150416	1,039	記録保存調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
野多目C遺跡	集落	縄文時代 弥生時代 中世	土坑、溝、小穴、自然流路	縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、瓦、 石製品、木製品、種子				
要約	<p>調査地は、福岡平野を北流する那珂川の西岸に形成された河岸段丘上に立地する、標高約15mを測る微高地に位置する。遺構は、現地表面下30~40cmの黄灰色粘質シルト層および黄灰色砂質シルト層で検出し、主に縄文時代中期~後期、古代~中世と考えられる遺構が検出された。検出された遺構の多くは古代~中世のものと考えられ、ほぼ東西~南北方向に延びる溝、土坑等を確認し、土師器皿や瓦等が出土した。縄文時代の遺構としては、中期~後期の阿高式系土器や条痕文土器が出土した土坑等がある。調査区の中央付近では、東西方向に流れる縄文時代後期~弥生時代前期後半頃の自然流路を確認した。</p> <p>遺構からは、阿高式系土器や条痕文土器等の縄文土器や石器、古代~中世の土師器皿や須恵器皿、瓦等が出土したが、量は少ない。また、検出した自然流路からは、縄文時代中期~後期の阿高式系土器や条痕文土器、西平式土器等の縄文中期から後期の土器が多く出土し、縄文時代の石鏃・削器・搔器・剥片等の石器、弥生時代前期後半の土器、板状の木製品等が出土した。</p> <p>検出された遺構は、密度は濃くないが、南端付近を除き調査区の全体に広がり、調査区北~東側には縄文時代、南~西側には古代~中世の遺構が分布する。今回の調査範囲は狭長なものであったが、周辺には遺構が広がっていることが明らかである。検出した自然流路からは、多くの縄文土器が出土しており、東側に隣接する第1次調査区で検出された貯蔵穴群等も含め、周辺に縄文時代中期~後期頃の生活域の存在が想定される。</p>							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1314集

野多目C遺跡 5

—野多目C遺跡第6次調査報告—

2017年(平成29年)3月27日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号印刷 石橋印刷株式会社
福岡市博多区東比恵3丁目21-10